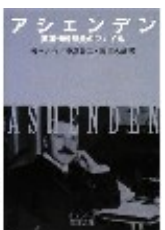


海外の小説は主人公の名前がカタカナ表記のため何となく読みづらいし、覚えにくいので自然と手を取る本は和書ばかりでした。そんな私の変な苦手意識を打ち破ったのがこのサマセット・モームでした。私が同じ本を何度も繰り返し読んでいるため「同じ本を何度も読んで飽きないの？」と聞かれるくらい手に取っています。主人公はイギリスの作家兼スパイ。彼を主人公とした短編集で構成されています。スパイ物と言えばスリルと緊張の連続と思いがちですが、アシエンデンは中立国のスイスを中心に動き回るので、何となくのんびりとしている感じがしました。かなり冷静に人間を観察するくせに極度の人見知りであるとか、私知っている007とかの格好いいスパイと全然違うのです。今回は「恋とロシア文学」という章でした。ロシアの十月革命を阻止すべく送り込まれたアシエンデン。彼には以前結婚まで考えたロシア人女性がいて、彼らは結婚をする前に上手くいくか一週間パリ旅行に行きます。彼女は毎日違う朝食を食べる事は「ブルジョワ的」と言ってもアシエンデンにも自分と同じ「スクランブルエッグ」を食べることを要求します。一週間は我慢したアシエンデンですが、この先毎日スクランブルエッグを食べることを想像して彼女と別れたその足でアメリカへと逃げ出してしまおうのです。これを読んで、「私も旦那さんに逃げられないように手抜きしないでご飯を作らない」と真剣に思いました。

F. N.



文春文庫

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞